

# Anal. Sci. を分析化学の拠点雑誌に



長谷川 健

日本分析化学会の欧文誌 *Anal. Sci.* は、長年の悲願であった IF=2 の壁を今年、2020 年に初めて突破した。科研費の補助を得て運営している本誌にとって、5 年計画の最後の年に IF=2.049 の報告を得たことは非常に安どするもので、まさしく前任の小澤岳昌先生率いるチーム戦の成果である。編集委員長に就任直後にこの報せは、機運を盛り上げる力となり、大変ありがたい。

1985 年に発刊した本学会の欧文誌 *Anal. Sci.* は、ACS の *Anal. Chem.* と並んでもっとも簡潔で端的に分野の性格を示す雑誌名をもち、当時よくぞこの優れた名前が確保できたものだと思う。しかし、その恵まれた名前の割には国内外を問わず知名度の低い状態が続いており、これが *Anal. Sci.* にとって今すぐ改善しなければならない問題である。分析化学の雑誌とはいえ、分析以外の人にも知ってもらうためには必要最低限の IF がある。

現在、あらゆる分野の化学雑誌で IF に振り回された狂乱状態が続いており、これが研究分野の極端な偏りと、基礎よりも応用を加速する効果をもたらし、流行に乗らなければ審査にも回してもらえないエディターキックが日常化している。20 年前ならオリジナリティーこそが研究成果の最大の売りになったが、現在では“今すぐ理解”されなければ相手にしてもらえない。こうした状況は逆にチャンスでもあり、まともな受け皿雑誌を求める多くのさまよえる論文を惹きつける工夫とアピールができれば、*Anal. Sci.* にとって上り坂の道が開ける。IF もその一つである。

現在、Google Scholar で Analytical Chemistry で検索して現れるトップ 20 誌に、残念ながら *Anal. Sci.* は入っていない。分析化学の一般誌である *Anal. Sci.* に分析化学での高い visibility を期待するなら、少なくとも専門誌に負けているようでは困る。20 位の *J. Chromatogr. B* が IF=2.5 付近であることから、*Anal. Sci.* が目指す IF は最低でも 2.5 である。必要な通過目標値である。国際的に振り向いてもらえる数値を確保できれば、有力な研究者に原稿依頼がしやすくなり、良い循環に入ることができる。ボランティアで多くの仕事をこなしてくださる編集委員会の先生方にとっても、目に見える達成感は絶対に必要である。

また、*Anal. Sci.* が世界の分析化学者に“見つかる”工夫も必要である。国際的には、低姿勢での売込みは相手にされない。ちょっと強気で楽しい雰囲気人が人を惹きつける。これには、海外の実績あるエディターを積極的に運営に参加させることも力になろう。国際的に理解が得られる運営を意識することも、必ずプラスに働くだらう。

さらに、分析化学は他の分野との連携が組みやすい、典型的な分野横断型の性格を持つ点も重視したい。これは、他分野にはあまりないもう一つの大きなチャンスであり、研究者本人も気づいていない“隠れ分析化学屋”を探し出して積極的に分析化学会に招き入れ、分析化学会と *Anal. Sci.* をセットで楽しい学術の場として見つけて欲しい。いつしか、*Anal. Sci.* が分析化学会にとって儲かる仕組みにできればと願いつつ、その一步を踏み出したところである。

〔Takeshi HASEGAWA, 京都大学化学研究所, 「Analytical Sciences」編集委員長〕